The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	流転する《ルネサンス》 : その背後にあるものは？
Author(s)	明山, 曜子; 高垣, 里衣; 松本, 智憲 他
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2016, 12, p. 20-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/62161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

流転する《ルネサンス》——その背後にあるものは？

明山曜子・髙垣里衣・松本智憲・平田良行

総論

19 世紀の文化史家ヤーコプ・ブルクハルトは、「個人主義」の始まるルネサンスの時代をもって「近代」の開始と措定し、中世とルネサンスの間に明確な分断線を引いた。この見解に対しては、チャールズ・H・ハスキンズをはじめとする中世史家たちによって批判が加えられ、中世からの文化的・経済的「継続面」が主張された。その後、この論争は、ヨハン・ホイジンガによって折衷説が提唱されたことで一応の決着が付けられた。ルネサンスは新旧文化が同時共存する「過渡期」にあるとされ、後にデニス・ヘイによって「中世後期から近代初期」の時代とされたのである。

かかる概念論争の紛糾は、「ルネサンス」を「時代区分」としてとらえるのか、あるいは「文化運動」ととらえるのかが曖昧であったこと、そして概念の適用地域をイタリアに限定するのか、それ以外の地域にも拡張するのかという点が、論者によってまちまちであったことが要因であろう [1]。

その意味で、史学史上で「複数ルネサンス」論が隆盛したことは、もっともなことであった。ハスキンズは、ラテン語古典と法学の復活、ギリシアやアラビア文献の翻訳、科学・哲学の復興、それらの総括としての大学の誕生という図式の中で 12 世紀の高度な文化現象を捉え、「ルネサンス現象」を中世に遡って見出した。伊東俊太郎も「12 世紀ルネサンス」を巨大な転換期として捉え、それを西欧世界とイスラム文明とが遭遇した事実に求めている。つまり、それまで閉ざされた地方的一文化圏にすぎなかった西欧世界が、ここではじめてアラビアの先進的な文明に接し、そこからギリシアやアラビアの進んだ学術・文化を取り入れ、自己の文明形態を一新したということである。

さらに「カロリング・ルネサンス」論の代表的な論者であるヴァルター・ウルマンは、カール大帝の治世下での古典復興運動を、「フランク民衆全体」の宗教再生を目指す運動、つまり社会全体のキリスト教化を目指す運動として捉えている [2]。

---

[1] ［望田他 2006：pp. 260-263］。論争の概略は［森田 1967］。
[2] ［佐藤他 2005：p. 134］。［伊東 2006 年］。

こうして現在では、歴史上に複数の「ルネサンス」が見出されることになったのである。このことにより、一見すると「ルネサンス」概念が希釈化されたような印象もあるだろう。あるいは、それらをことさら「ルネサンス」と呼ぶ必要があるのか、果たしてそれらは一括りに把握することが可能であるのか、といった疑問も浮かぶかもしれない。

しかし、これらの研究は、西洋中世がつねに古典とともにあり、不断に連続する古典復興運動のなかで展開していたことを示してもいる。本稿では、「ルネサンス」の概念的な位相には留意しつつも、もう一度各「ルネサンス」をそれぞれの歴史的文脈の中で丁寧に検討し、それらを貫く「ルネサンス」概念の再構築を試みたい。

結論を先取りするならば、我々が見出している「ルネサンス」＝古典復興運動とは、古典文化を参照軸とした、政治的・経済的・文化史的要因の複雑に絡まった、共同体の動態的凝集運動であったということである。また、検討の中では、そうした運動と分かちがたく結びついて形成される歴史的自己理解、すなわち「ヨーロッパ」観念の醸成も捉えられることになろう。かかる問題意識を確認した上で、我々はこの課題に対して以下のように取組むことにする。

まず、第 1 章において「カロリング・ルネサンス」概念が生まれた研究史上の問題を考察する。そこから「カロリング・ルネサンス」を取り巻く実態が考察され、「ピレンヌ・テーゼ」が批判的に再検討される。一連の考察を経て、ここでは「カロリング・ルネサンス」の意義を、「ヨーロッパ」普遍的な「思考の様式」と「方法」を形成した点に求めている。

次に、第 2 章の「12 世紀ルネサンス」は、中世からの「古典文化の復興運動」、すなわち「ルネサンス」の継続・連続性を指摘しつつも、これらが 16 世紀のイタリア・ルネサンスを準備する一現象とされていることに疑義を呈している。つまり、「複数ルネサンス」の登場とともに、ルネサンス概念が希釈化されることを懸念しつつも、これを批判的に再検討することで、もう一度「12 世紀ルネサンス」が誕生した史的コンテクスト検討している。そこで、「ヨーロッパ世界」の内的な文化的要因だけではなく、環境史などを参照しながら動態的に考察している。

最後に、第 3 章の「イタリア・ルネサンス（14-16 世紀ルネサンス）」は、これまでの 1,2 章とは変わって「イタリア・ルネサンス」、すなわち「14-16 世紀ルネサンス」を世界的な目線で相対化しながら考察している。環境史や経済史を参照しながらの地球規模での視野でイタリアを取り囲む「環境」を考察し、外世界との交渉の中に「ルネサンス」を開き、「近世」への接続の必要性を最後に指摘している。

第 1 章　カロリング・ルネサンス

(1) 教科書における「カロリング・ルネサンス」

本章において検討の対象とした教科書は『市民のための世界史』（4刷、以下『市民』）及び高校世界史Aの教科書[3]である。「カロリング・ルネサンス」とは端的に言えば、カール大帝の時代におこった文化運動である。教科書にも『市民』にもこの用語（「カロリング・ルネサンス」）はない。カール大帝時代の文化について最も詳しく記載している山川出版社（H24 年版）でも、「（カール大帝が）各地から多くの学者を宮廷にまねき、文化の復興につとめた人物」（括弧内筆者）であったと紹介するにとどまっている。一方で『市民』も教科書も共通して、カール大帝の戴冠[4]（800 年）が「西ヨーロッパ」形成における決定的な契機となったことを記述している。H10 年代の教科書ではカールの戴冠が「西ローマ帝国の復活（復興）」や「ビザンツ帝国からの自立」というようにビザンツ帝国との対比を重視した表現が多数みられるのに対し、H20 年代の教科書や『市民』では「西ヨーロッパ（世界の形成）」というような表現に変わっていることにも注意しておきたい。

『市民』や H20 年代の教科書では、カール大帝の戴冠により、地中海のイスラム世界、東方正教の東ヨーロッパ世界、ローマ・カトリックの西ヨーロッパ世界という３つの特色ある地域世界に分かれるようになったと記述されている。このことは、「ゲルマン人」、「ローマ・カトリック」、「ラテン文化（ローマ帝国の伝統）」を基盤とした西ヨーロッパ世界の誕生が、イスラム世界や東ヨーロッパ世界との関わりなしにはあり得なかったことを示している。

これと関わって、東京書籍（H24 年版）の教科書がコラムの中でアンリ・ピレンヌの有名な言葉である「マホメットなくしてシャルルマーニュなし」を取り上げていることは注目される。イスラム勢力の地中海進出によって西ヨーロッパは純然たる内陸国家になったというピレンヌの主張が誤りであったことはすでに指摘されているが[5]、それでもこのコラムは、カールの戴冠がヨーロッパ世界の枠内では捉えきれない出来事であることを示すうえで大きな効果を発揮しているといえよう。

このようにみていくと、「カロリング・ルネサンス」は、少なくとも高校生が最低限理解しておくべき事柄とはみなされていないことがわかる。一方で、カール大帝の戴冠が「西ヨーロッパ」世界誕生の契機として重要な位置づけを与えられている。では「カロリング・ルネサンス」とは何か。これについてはこの概念とその実態とに分けて考えなければなるまい。

(2) 概念としての「カロリング・ルネサンス」

---

[3] 検討した教科書は清水書院（H9,H14）、実教出版（H10,H14,H17,H24）、帝国書院（H10,H26）東京書籍（H10,H19,H24）、桐原書店（H15）、三省堂（H14）、第一学習社（H14,H24）、一橋出版（H14）、山川出版社（H24）である。

[4] 戴冠は、「ローマがもう一度ローマ帝国の中心地になる、最終的で厳粛な行為に当たる」という意味を持った［ウルマン 1965：p. 66］。

[5] ［服部他 2006：pp. 178-179］。

「カロリング・ルネサンス」の存在はかなり早くから指摘されており、フランスの歴史家であるジャン＝ジャック・アンペールが1839年の『シャルルマーニュ朝文学史』でそれを取り上げた頃には、ドイツ人も「カロリング・ルネサンス」についての書物を刊行し始めていた[6]。ジャック・ル＝ゴフによると、この概念は19世紀当時のライン川両岸で愛国的な理由によって過度に強調されることになったという[7]。20世紀初頭になると、アンリ・ピレンヌは「この運動〔カロリング・ルネサンス〕にルネサンスという言葉を用いることはやや行き過ぎの感を免れない」とし、それが「ルネサンス」と言えるものであったのかどうか疑問視した[8]。

その後、20世紀の半ばになると、ウルマンによって「カロリング・ルネサンス」に対する斬新な見解が提示された。彼は「カロリング・ルネサンス」をフランク民衆全体の宗教再生を目指す運動、つまり社会全体のキリスト教化を目指す運動として捉えた[9]。津田拓郎によると、ウルマンの見解の重要性は、聖職者や知識人レベルだけでなく、一般信徒である民衆をも巻き込んだ社会全体に関わるもの」と捉えた点にあるという[10]。近年における「カロリング・ルネサンス」についての捉え方は、このウルマンの見解が踏襲されている。

以上は19世紀以降の「近代」人達が捉えた「カロリング・ルネサンス」のイメージ（概念）の変遷と言える。「カロリング・ルネサンス」はブルクハルトに代表される中世との対立概念としての「ルネサンス」観に反駁するかたちで登場したもの[11]とも言われるが、ヨーロッパの国際情勢が大きく変化した19、20世紀という時代状況をふまえれば、それはヨーロッパ諸国が各自の民族問題と向き合う中で求められたものであったという側面も見逃すことができないのである。

以上をふまえつつ、次節では「カロリング・ルネサンス」が花開いたカロリング時代におけるフランク王国の当時の人々がどのように感じていたのか、どのような文化活動を行っていたのか、といった点について考察したい。

(3) カロリング朝当時における「カロリング・ルネサンス」

9世紀末の修道士ノートケルが、カール大帝の時代になって「フランク人やガリア人は、ローマ人やアテナイ人に肩を並べるまでになった」と述べているように、カロリング時代の人々は、カール大帝のもとで文化復興が行われ、豊かな文化が育まれるようになった時代に生きていると信じていた[12]。

---

6 [ル＝ゴフ 2005：p. 94]。
7 [ル＝ゴフ 2005：p. 94]。
8 [橋本 1975：p. 122]。
9 [津田 2005：p. 77]。
10 [津田 2005：p. 77]。
11 [梅津 2012：p. 27]。
12 [五十嵐 2006：p.185]。

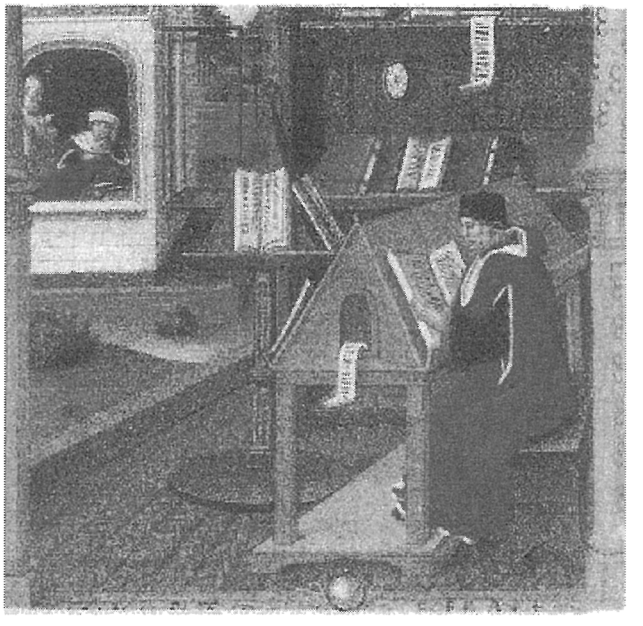
「カロリング・ルネサンス」は、カール大帝（シャルルマーニュ）の下でフランク宮廷と修道院が主導した。カール大帝は、聖職者の教育水準が低く、ラテン語を十分に習得していないことに強い危機感を抱き、彼らに対して学芸を奨励したのである。その目的は協会の発展であり、キリスト教理念基づく国家統治の遂行であった[13]。

運動の中心となった修道院や司教座附属学校には大幅な自由が与えられた。イタリアやイギリスのように学校がまだ健全であった国々出身の学者達が集められ[14]、教育の基礎となる学科整備が進められた。学問が奨励された結果、神学的な著作から歴史叙述に至るまで様々な多くの写本が作られるようになった[15]。また、カロリング小文字で書かれた著作を彩飾し、本格的な芸術作品を専門的に請け負うスクリプトリウム（写本製作所、図1）が多くの修道院に設置された[16]。聖職者たちは、初期の大学が軌道に乗るまでの修道院付属学区における教師であり、またきらびやかな装飾が施された写本の作成等を手がける本格的な芸術家でもあったのである[17]。彼らの手で作成された写本は、時間と空間を越えて言葉とシンボルと価値とを永遠に定着させる[18]だけでなく、当時の社会状況を考察する上でも重要な史料となっている。

一方、カール大帝はローマ・カトリックの擁護者としての役割をただ担うだけでなく、王国全土に広がる（拡げた）教会組織を帝国統治に利用した。聖職者に対する十分の一税の義務化、教会法やフランク法の推進、教会組織と聖職者を利用した地方自治など、修道院ネットワークを利用した効率の良い統治が行われたのである。

しかし、こうした統治機構は必ずしも継承されていかず、カール大帝の死後には機能不全を起こしていく。これに対し、彼が作った教育組織はその後数世紀にわたって継続した。ジャック・ブウサールはカロリング朝の歴史的意義について、行政制度や社会構造のあり方が「過渡期」的なものにとどまる一方、「カロリング・

［図1］スクリプトリウムの様子



（フランソワ・イシェ『絵解き 中世のヨーロッパ』原書房、2003、19頁より転載）

---

13 ［五十嵐 2006：p.184］。
14 ［ブウサール 1973：p. 166］。
15 ［五十嵐 2006：p. 185］。
16 ［イシェ 2002：p. 17］。
17 ［イシェ 2002：pp. 12-13］。
18 ［イシェ 2002：p. 17］。

ルネサンス」と呼ばれる文化の領域においては「画期」としての性格を有していると述べている。「カロリング・ルネサンス」の最も重要な意義は、まさしく「西ヨーロッパのすべての民族に共通する思考の『様式』ないし『方法』を作り出した」ことにあったといえるだろう[19]。

なお、「キリスト教共同体」たる西ヨーロッパ世界の成立には、当時のヨーロッパ外部の動きが関係していることも忘れてはなるまい。先述したように、イスラム勢力の地中海進出によって西ヨーロッパが純然たる内陸国家となってしまったとするピレンヌの主張は今日では認められていない[20]。というのも、商業や経済レベルではむしろ活発な交流がなされていたからである。また、アラブ・イスラム勢力との戦いに忙殺されていたビザンツ帝国が、伸張するランゴバルド勢力の圧迫に苦しむ教皇の救援要請に充分に応えられなかったことは、教皇がフランク人へ接近する要因（カールの戴冠へと結実）にもなったとされているのである[21]。

(4) 小結

現在では、中世＝「暗黒時代」ではなく、「暗黒時代」はむしろルネサンスの連続として考えられている。「カロリング・ルネサンス」も芸術に限らず、教育・学問・文芸の広い範囲にわたって西欧文化の開花をもたらした文化運動[22]であった。

ブウサールは古代文化を中世に伝え、また中世を介して近代文化をも育んだ点に、この運動の世界史的な位置づけを求めている[23]。特に教会とその組織が世俗の国家統治と密接に結びついているという西ヨーロッパの特徴は、カロリング朝期に形成された。このことは叙任権闘争、宗教改革などその後のヨーロッパ史に大いなる影響を与えることになる。またブウサールは「教会的教養」として出現しただけでなく、西ヨーロッパのすべての民族に共通する思考の「様式」ないし「方法」を作り出した点にこのルネサンスの特質を見いだした。宇野重規は「聖書や教父の伝統、修辞学（レトリック）や哲学の伝統とが緊張感をはらみつつ併存する」[24]と表現している。すなわち、「カロリング・ルネサンス」とは、その後のヨーロッパ文明を規定することになる特徴の端緒となった点で「古典古代の文化の復興運動」という「ルネサンス」と聞いて想起する特徴を有していると言えるのではないだろうか。

---

19 [ブウサール 1973 : pp. 286-290]。
20 [五十嵐 2006 : pp. 178-179]。
21 [根津 2006 : p. 273]。
22 [坂部 1997] などで言われる哲学の発展もその一つといえよう。
23 [ブウサール 1973 : p. 286]。
24 [宇野 2013 : p. 56]。

第2章　12世紀ルネサンス

(1)「12世紀ルネサンス」とは

「12世紀ルネサンス」という概念は、アメリカの中世史家ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』という著作によって市民権が与えられたといわれている[25]。ハスキンズは12世紀におけるラテン語古典や法学の復活、ギリシア語やアラビア語文献の翻訳といった現象に着目し、「中世」の中に「ルネサンス」すなわち古典復興運動を見出したのであった[26]。

この概念が歴史学の用語として定着したことは、こうしたハスキンズの試みが成功したことを示していよう。研究者によって異なるものの、現在では中世における「ルネサンス」は先に述べた「カロリング・ルネサンス」などを含めて複数回あったと理解されており、まさしく「中世というのは実はルネサンスの連続」[27]なのであった。ルネサンス期の人文学者たちが考えたような、模範たる「古代」と「近代」との間に挟まれた暗黒の「中世」というイメージは、今日ではほとんど払拭されているのである。

それら複数の「ルネサンス」の中でも、最も注目され議論されてきたのが「12世紀ルネサンス」である[28]。「12世紀ルネサンス」という文化運動は様々な側面を持っているので、まずは簡単ながらそれらを紹介しておこう[29]。学問・思想分野を見てみると、古典作家などの作品の頻繁な引用、写本数の増加、知識人によるラテン語文体の擬古化など「古典の復興」と言うべき現象が見られた。弁証学及び法学もこの時期に隆盛を迎え、12世紀末には大学が形成されるに至る。

建築の側面では、ロマネスク様式が開花しゴシック建築が成立したのがこの時期であった。このほか音楽の側面でもグレゴリオ聖歌が完成するなど、12世紀を画期としてあらゆる文化生活の側面で隆盛が見られたのである。

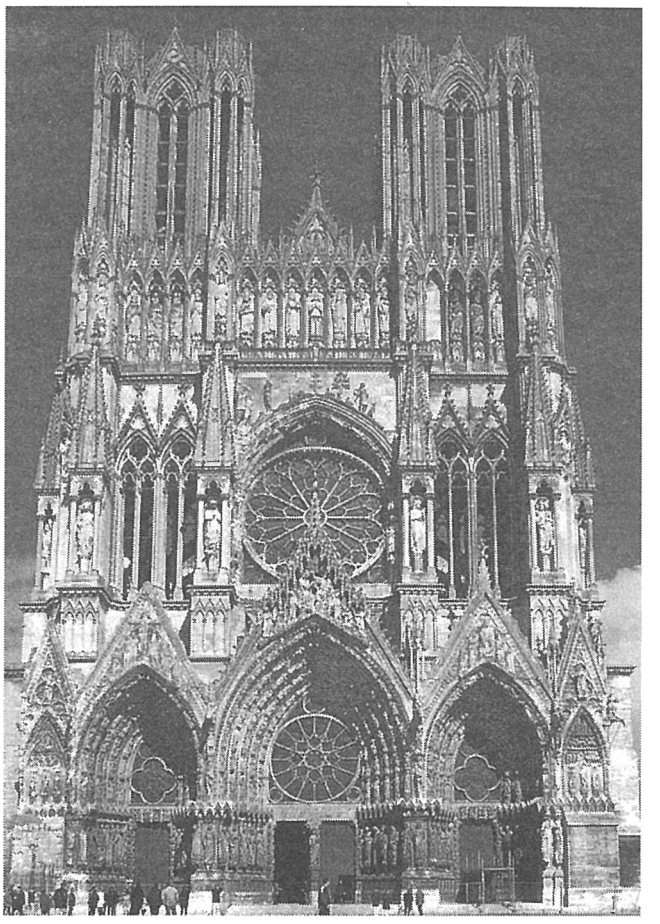
以上のような側面の他にも、「12世紀ルネサンス」において注目すべきものとして、イスラムや古代ギリシア文献のラテン語への翻訳活動が挙げられる[30]。イベリア半島のトレドやコルドバ・カタルーニャ地方・シチリア島・北イタリアなどの諸地域でギリシア＝イスラム文化に接触し、活発な翻訳活動が行われた。こうした翻訳活動を通じたギリシア＝イスラム文化の吸収は、ゴシック建築へのユークリッド幾何学の利用や（図2)、13世紀後半のトマス・アクィナスによる体系的な神学樹立など、12世紀ひいてはそれ以降の時代に大きな影響を与えたのである。

---

25 ［ヴェルジェ 2001：p. 7］。
26 ［ハスキンズ 1989］収録の朝倉又市「解説」に拠る。
27 ［伊東 2006：p.50］。
28 ［山本他 1988：p.256］。
29 以下本節の内容は［山本他 1988：pp.258-263］に拠る。
30 ［山本他 1988：pp.260-262］。［伊東 2006］。

(2) 高等学校教科書の検討

[図２] ゴシック様式の建築物（ランス大聖堂）



（佐藤達生・木俣元一『図説　大聖堂物語　ゴシックの建築と美術』河出書房新社、2000 年、8 頁より転載）

本節では「12 世紀ルネサンス」が日本の高等学校教科書においてどのように用いられているか見てみる。

まず世界史 B に関して見てみると、近年の教科書において「12 世紀ルネサンス」という語句が登場していることが確認できる [31]。一方で、世界史Aの教科書を見てみると [32]、「12 世紀ルネサンス」という語句が確認できたのは管見の限り『新世界史 A　改訂版』（清水書院、1997 年検定済）・『高等学校　世界史 A』（第一学習社、2002 年検定済）の 2 社のみであり、ごく限られたものである。

しかし、世界史 A の教科書では、「12 世紀ルネサンス」という語句こそほとんど見いだせないものの、前節で見たような「12 世紀ルネサンス」が持つ諸側面、すなわちスコラ学の隆盛や大学の設立、アラビア語文献の翻訳による古典文化の吸収などに触れている教科書が多いことがわかる。それらは「12 世紀ルネサンス」という 12 世紀の文化運動として強調されるのではなく、14-16 世紀のイタリア・ルネサンス、すなわち一般に言われる「ルネサンス」への準備段階として位置づけられているのである [33]。

こうした記述は、かつての暗黒の「中世」というイメージを緩和させ、近代の始まりであるとされる「ルネサンス」に中世以来の影響があったことを明示している点で高く評価できる。しかしながら、こうした「12 世紀ルネサンス」の諸要素を分解し、「ルネサンス」

---

[31] 検討したのは『世界史 B』（東京書籍、2012 年検定済）、『新詳　世界史 B』（帝国書院、2014 年検定済）、『世界史 B』（山川出版社、2014 年検定済）の計 3 冊である。

[32] 検討したのは桐原書店（H10,H15）、三省堂（H9,H14）、清水書院（H9,H14）、実教出版（H10,H24）、第一学習社（H14,H24）、帝国書院（H10,H18H24）、東京書籍（H10,H15,H19,H24）、一橋出版（H9,H15）、山川出版社（H15,H18H24）である。

[33] 例えば『世界史 A』（東京書籍、2007 年検定済）43 頁など。

の準備段階として単純に捉えるのであれば、文化史上における 12 世紀の文化運動が持った画期性が十分に理解されないのではないだろうか。こうした傾向は『市民』も共有しているように思われる。

以上のような教科書の記述を踏まえると、「12 世紀ルネサンス」といわれる現象がどのような歴史的背景のもと生じたのか、あるいは「12 世紀ルネサンス」についてどのような研究がなされてきたのかを見ることで、それが持つ歴史的意義を明確にする必要があると考える。これらについて次節以降で検討を進めよう。

(3)「12 世紀ルネサンス」の背景

「12 世紀ルネサンス」といわれる文化運動は、政治・経済・社会などの諸領域における大きな社会変動を背景に生じた運動であった。ここではそうした「12 世紀ルネサンス」の社会背景を見てみたい。

9 世紀から 13 世紀にかけて、世界各地の気温が上昇した。すなわち中世温暖期である [34]。こうした気温上昇が遠因となって、11 世紀から 13 世紀にかけて人口増加と耕地拡大が相互関係的に進んだ。こうした現象は気候条件のみならず、例えば三圃制導入のような農業技術の革新などが影響していたことは言うまでもないが、この人口増大と耕地拡大は農業生産力を増大させ、領主階級の発展や都市の成長を相互関係的に支えることとなった [35]。

また、11 世紀半ばから 12 世紀初めにかけて教皇座を中心に行われたグレゴリウス改革についても目を向ける必要がある。カロリング朝以降の教会は世俗権力の支配下に置かれており、教会秩序の乱れや、聖職者の妻帯などの教会内での悪習が問題となっていた。こうした状態を改善するべく、グレゴリウス改革はレオ 9 世によって本格的に開始され、グレゴリウス 7 世による推進を経て、1123 年の第一ラテラノ公会議で完了する [36]。

この改革は、12 世紀および 13 世紀における教皇権威高揚、統一的法体系の形成などのきっかけを与えるとともに、この改革によって西欧社会が全面的に教会の指導下に入り、教会的文化の中へ包摂されることになるなど、西欧世界に非常に大きな影響を与えた [37]。また、この改革では、キリスト教徒を霊的に指導する聖職者、とりわけ高位聖職者の必須条件として、学識が主張された [38]。

以上、人口増加と耕地拡大、それによる農業生産力上昇、都市の成長、領主階級の発展、グレゴリウス改革における学識の強調などを見てきた。これらの諸要素は複雑に絡み合い、12 世紀における文化運動を背景として支えることとなったのである。すなわち、都市の成

---

[34] [田家 2010 : pp. 162-175]。[ベーリンガー2014 : pp. 106-121]。
[35] [山本他 1988 : p. 217]。
[36] [山本他 1988 : pp. 225-230]。
[37] [山本他 1988 : pp. 230-232]。
[38] [江川他 1995 : p. 207]。

長やそれに伴う商業・交通の発展は、文化活動の展開する場とその交流を用意した[39]。また、グレゴリウス改革による学識の強調は、学識に教会内での栄達手段としての価値を付与することになり、学校の再興とそこでの教育・研究の活性化をもたらした。「12 世紀ルネサンス」と言われる文化運動は、まさしくこうした当時の政治・経済・社会などの多様な側面の影響をうける形で隆盛してきたのである。

では、本節で見たような背景を持ち、第 1 節でみたような側面を持つ「12 世紀ルネサンス」について、どのような研究がなされてきたのだろうか。次節で見たい。

(4) 研究史整理

本節では、ジャック・ヴェルジェの研究に拠りつつ、「12 世紀ルネサンス」に関するこれまでの研究動向を紹介したい[40]。

「12 世紀ルネサンス」という概念を提起したのは、上述したようにハスキンズであった。ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』は、「ルネサンス」という言葉の概念の使用を巡って論争を引き起こしたが、彼の意図は、「12 世紀ルネサンス」の中世的独自性を示すとともに、文化的次元で 14-16 世紀ルネサンス、すなわちイタリア・ルネサンスとの特徴を共有していることを示す点にあった。

これ以後、12 世紀に関する研究が蓄積されるとともに、「ルネサンス」概念自体の考察が深化していくこととなるが、とりわけ第二次世界大戦後には、エルヴィン・パノフスキーらによって研究が大きく進展した。その結果、12 世紀に「ルネサンス」概念を適用すること自体は否定しないものの、「12 世紀ルネサンス」とイタリア・ルネサンスとの根本的相違点として、前者においては長い暗黒時代、すなわち「中世」が古代と自分たちとを引き離しているという歴史認識が存在していなかったことが明らかにされた。そして現在では、「12 世紀ルネサンス」については過去の復活や復興ではなく、発展や覚醒、ダイナミズムの側面が強調されているのである。

このように、ハスキンズの『十二世紀ルネサンス』以後、12 世紀に関する研究が精力的に進められたことにより、近年では第 3 節でみたような「12 世紀ルネサンス」と政治的側面との関係、あるいは教会改革との関連性に興味が向けられている。「ルネサンス」概念が含意する古典古代の「復興」運動という側面に限定せず、広く文化運動という視点からとらえることで、「12 世紀ルネサンス」の多様な側面が明らかにされているのである。

他方、「12 世紀ルネサンス」のもつ地域的・時間的広がりについても、修正が求められている。例えば、今日では 12 世紀中葉を転換点として、その前後で無視できない断絶があるとされ、ハスキンズが「12 世紀ルネサンス」として捉えた 11 世紀末から 13 世紀半ばまで

---

[39] [山本他 1988 : p. 258]。
[40] [ヴェルジェ 2001 : pp. 7-23]。

の時期を二分する見解も提唱されているのである[41]。「12 世紀ルネサンス」研究は、なお深化の余地を残しているといえよう。

(5) 小結

以上、本章では「12 世紀ルネサンス」の諸側面や背景、研究動向および教科書での取り扱われ方などを概観した。ここで本章を小括するとともに、高等学校教科書における「12 世紀ルネサンス」の記述のあり方について考えてみたい。ハスキンズによる「12 世紀ルネサンス」概念の提唱以降、研究の進展により、おおむね 11 世紀半ばから 13 世紀半ばにかけては、かつての研究が描いてきたような暗黒の「中世」という範疇では捉えることができない文化運動＝「12 世紀ルネサンス」が存在したことが明らかにされている。それは当該期の政治・経済・社会といった諸領域の状況に規定されて展開した運動であったが、その影響はイタリア・ルネサンスのみならず、ヨーロッパ世界全体に及ぶものであり、現代をも規定するものであった。

これらのことを鑑みたとき、当該期の文化運動に関する高校世界史教科書の記述が、建築・文学・学問などの諸側面での変化の連関性を明記せず、個別的な紹介にとどまっていること、あるいは翻訳活動の側面のみをクローズアップし、イタリア・ルネサンスの一前提としてのみ位置づけていることは不適当であろう。当該期にはあらゆる文化面で隆盛が見られたことを包括的に示す必要があると考える。その点で、「12 世紀ルネサンス」という語句は、こうした当該期の文化運動を包括して説明する際には大変便利であるし、イタリア・ルネサンスを相対化し、暗黒の「中世」という観念を覆す上でも有効なのである。

とはいえ、「ルネサンス」という言葉で一括りにしてしまうことによって、かえって当該期の文化運動が持つ古典復興に限らない多様な側面が捨象されてしまう危険性や、イタリア・ルネサンスとの関わりの中でしか捉えることができなくなってしまう恐れもある[42]。「12 世紀ルネサンス」という言葉にとらわれることなく、当該期の文化運動が持つ多様な側面を包括的に説明する教科書記述が求められるだろう。

第 3 章　イタリア（14-16 世紀）ルネサンス

(1)「ルネサンス」の揺籃：イタリア・ルネサンス再考

フランス語で「再生」を意味する「ルネサンス」(Renaissance) という言葉は、19 世紀になって普及するようになった。ここには後世の歴史家が付与した「外的イメージ」と、

---

41 [山本他 1988 : p. 263]。
42 同様の指摘は、田中峰雄によってもなされている [山本他 1988 : p. 263]。

ルネサンス期の人文主義者達の抱いていた「内的イメージ」が存在している。前者に関しては総論で簡単に紹介したので、ここでは後者について述べておこう。

「再生」(renovatio) という単語は古代・中世からあったが、古代の再生という観念を最初に想い描いたのは、14 世紀のペトラルカであった。ペトラルカは直前の時代を「暗黒時代」と呼び、いまこそ古代の光輝に回帰する必要があると訴えた。続く 15 世紀のフラヴィオ・ビオンドはこの「暗黒時代」を「中間の時代」(medium aevum) と呼んだ。16 世紀になると、ヴァザーリが、14-16 世紀を古代芸術の「再生」(rinascita) の時代として把握した。このように、当時の都市上層市民たちは、同じく都市文化たるアテネ・ローマの古典文化に共鳴し、中世のキリスト教的歴史観(キリスト生誕の前後で二区分する)とはまったく異なる、三時代区分法という新しい歴史観のうちに生き始めていたのである[43]。

ヘイの名著として誉れ高い『ヨーロッパ、ある理念の浮上』によれば、当該期には次の三点の要因によって「ヨーロッパ」という言葉の出現頻度が飛躍的に増大し、「キリスト教世界」と同義語として用いられるようになるとする。

第一に、イスラム世界との関係である。西ヨーロッパ人は、頻繁な接触によりこの世界の住民や宗教への知識をふくらませ、彼らが自分たちとは非常に異質な「他者」であることを認識したのである。本章でも後述するが、とくに 14 世紀末からはオスマン帝国の脅威の加速度的増大により、西部ヨーロッパにおけるキリスト教徒の閉塞感が高まり、「ヨーロッパ」と「キリスト教世界」とが否応なしに一致させられることになる。

第二に、「キリスト教世界」における内発的な危機意識である。14 世紀以降、教皇庁は教会の中央主権化を推進し、経済的基盤を固めたが、その霊的・政治的動揺が収まることはなかった。1348-49 年の黒死病の大流行やその他の疫病の流行も、人々の精神的不安をかき立てた。

第三に、「ルネサンス」である。ここまで見てきたように、古典古代文化に関する多種多様な知識は中世から存在していた。しかし、14-16 世紀に生じたのは、この文化をみるパースペクティブの変化である。江川溫の整理によれば、中世に生きる人々にとって、古代人の学問は時空を超えて存在し続ける普遍的な知であった。これに対して、イタリアの知識人と芸術家は、古典古代の学問、文芸、芸術を一度遠い過去に属するものとして歴史化したうえで、自らの文化的源流として位置づける操作をおこなったという[44]。

かかる議論をまとめれば、知識人の観念の中で「自我認識」の射程が空間的にも時間的にも拡張されてきている、と言えるかもしれない。14-16 世紀ルネサンスもまさしくその過程に位置するといえよう。1、2 章との関係性について付言するならば、「カロリング・ルネサンス」から「12 世紀ルネサンス」、そして 14-16 世紀ルネサンスという連続する複数の「ルネサンス」は、西ヨーロッパ世界の歴史的な自己認識、すなわち「ヨーロッパ観」の形成・変化の過程であったと言えるのである。

---

43 [望田他 2006 : pp. 260-263]。
44 [江川 2003]。

(2) 14-16 世紀ルネサンスの概観

14-16 世紀に生じたイタリアを発信源とする「ルネサンス」は、かつて近代の始まりとして認識されていた。14-16 世紀ルネサンスは、14 世紀にヨーロッパ中で猛威を振るった黒死病が終焉しつつあり、人口が緩やかに増加していた時代背景の下で展開した。画家ラファエロ・サンティ（1483-1520 年）が「アテネの学堂」（図 3）で描いたように、この運動は古代ギリシア・ローマ文化の礼賛とその復興を基調とするものであった。

[図３]「アテネの学堂」(1509-1510 年)

(http://tokyoweb.sakura.ne.jp/gallery/travel/foreign/italia/italia7/italia7.html より転載。2016/1/28 閲覧)

イタリアおいてルネサンスが生じた要因は、オスマン帝国との商取引とその脅威であり、またビザンツ帝国の崩壊によるギリシア人知識層のイタリア諸都市への流入であった。その後、知識人あるいは宮廷人の交流によってルネサンスがヨーロッパ各地へ伝播したことは、もはや言うまでもない。

しかし、この運動はユリウス 2 世やレオ 10 世に代表される教皇や、メディチ家など各都市の大商人の保護なくしては発展しえなかったものであり、その意味で、多分に貴族的な性格を有する運動であった点に大きな限界があった。ミハイール・バフチーンは、14-16 世紀ルネサンスは貴族・知識人と民衆とを分断するものであったとしている [45]。また、ロベール・ミュシャンブレッドも、中世において貴族的文化と民衆的文化は融合を試みていた

[45] [バフチーン 1988]。

が、14-16 世紀のルネサンスにおいては、むしろ貴族的文化が民衆的文化を抑圧しようとしたと述べている[46]。

なお、14-16 世紀ルネサンスは、大航海時代が始まったことによる商業的中心地の西方への移動と、神聖ローマ帝国及びスペインとフランスとが約 100 年にわたりイタリア利権をめぐって争ったイタリア戦争という、ヨーロッパを襲ったふたつの衝撃によって衰退に向かうこととなる[47]。以上を踏まえつつ、次節以降では 14-16 世紀ルネサンスの内容を簡潔に述べたのち、その教科書記述を検討することとしたい。

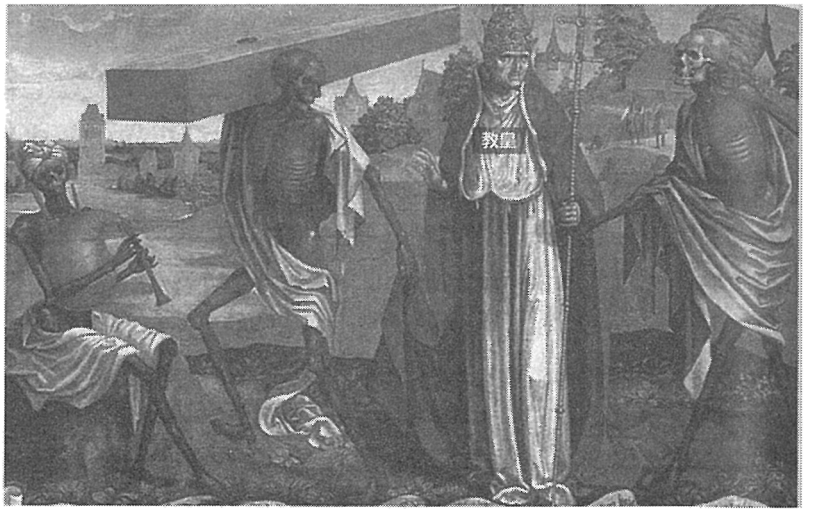
(3) 14-16 世紀ルネサンスの内容

14-16 世紀ルネサンスは、社会的危機を背景に生じた現象であった。「14 世紀の危機」と呼ばれる当該期の社会的危機は、1310 年以降における小氷河期の到来による地球規模での冬の寒冷化と夏の降雨量の増加に起因するものであった。凶作による大飢饉と農作物価格の高騰、チフスの蔓延や黒死病の流行による人口激減、農作物価格の暴落による農村社会の衰退という一連の流れは、ヨーロッパ中世社会に大打撃を与えた。

政治面を見ると、フィリップ 4 世による教皇ボニファティウス 8 世のアヴィニョン幽閉と、それによって生じた教会大分裂は、絶対的であった教皇権の動揺を招いた。また、百年戦争（1339-1453 年）の戦禍はイングランドやフランスの農村と都市を疲弊させるものであった。ヨーロッパ各地で起きた親方職人層らによる都市での反乱や、ジャックリーの乱やワット・タイラーの乱に代表されるような農村での一揆も、当該期の社会混乱を助長した。

こうした状況下、人々は「死を想え（メメント・モリ、memento mori）」の考えを持つにいたった。これは「死の舞踏」（図 4）の絵画からもうかがうことができる。ペストの大流行で死に直面したヨーロッパの人々は、もはや神を信じることよりも個人を尊重する生き方を求めるようになった。こう

［図４］「死の舞踏」（バーント・ノトケ作、1463 年）



（『新詳　世界史 B』帝国書院、2010 年、88 頁より転載）

[46] ［ミュシャンブレッド 1992］。
[47] *Ibid.*

した時期に書かれたのが、ボッカチオの『デカメロン』やチョーサーの『カンタベリ物語』であった。こうした社会状況の中で、教会権力は徐々に力を失いつつあった。

再三述べてきたように、「ルネサンス」は 14-16 世紀のみに生じたものではない。このルネサンスを特徴づけたのは、諸都市が分裂し、神聖ローマ、フランス、スペイン、オスマン帝国などの介入を受けていたイタリアにおいて、自らのアイデンティティを見出す必要性があったことである。これにより、古代ローマの文化を当時のイタリア人と結びつけて考える動きが生じた。イタリア・ルネサンスは、まさしくイタリア諸都市におけるエトニー意識（民族意識）が現れた結果であった[48]。

こうして生まれたイタリア・ルネサンスは、活版印刷の普及を促進要因としつつ、イタリアからヨーロッパ各地へと伝播し、それぞれの土地の文化的地域性と融合して、さまざまな文芸作品を生み出すこととなった。

(4) 教科書記述の検討

本節では、ここまで述べてきたような 14-16 世紀ルネサンスについて、教科書ではどのように記述されているのかを、とくに高校世界史 A の教科書を中心に見ていく。

世界史 A の教科書において、基本的にルネサンスは近代のはじまりの象徴的な事象として置かれている。そこでは、カトリック教会が絶対的権威を持ち人々はそれに従うという中世とは異なり、個人の自由と個性を尊重した時代のはじまりであったとして対比的に描かれる。つまり、教科書においては、「総論」で触れたブルクハルトの断絶論が未だ根強く残っているのである。

また、古典古代文化の見直しは、ビザンツ帝国の崩壊により古典古代文化を保持していた東方の知識人達がイタリアへ流入したことによってはじまったと記述されている。しかし、古代文化の見直しはこの時にはじめて開始されたわけではなく、既に中世を通じて行われてきたことは、前章までで述べたとおりである。この点に関して、世界史 A の教科書ではほとんど言及がないが、例えば山川出版社の『詳説世界史 B』(2014 年版) では、依然としてルネサンスが近現代の出発点として位置づけられているものの、中世文化を継承し発展させている面もあることが記述されている。

また、イタリアから他国へ普及し、普遍的な現象となったことも明記する必要があるが、この点について言及している教科書は比較的少数であった[49]。その中でもネーデルラントとドイツへの波及のみを取り上げている教科書があるが、これは 1517 年にルターが 95 ヵ条の論題を発表したことに端を発する宗教改革への繋がりや、ボヘミアのフス戦争やネーデルラントの思想家・エラスムスへの影響を意識しているのだろう。

なお、ルネサンスとも連動する当該期の出来事として、中国から東方貿易などを伝って

---

[48] [江川 2014 : p. 108]。
[49] [資料 1]。

ヨーロッパへと伝来した、火薬あるいは大砲・羅針盤・活版印刷という科学分野におけるいわゆる「三大改良」も含めて記述する必要がある。これについては多くの教科書において一応の言及はあるものの、その原点が中国にあることを述べているのは2002年の桐原書店のみであった[50]。

(5) 小結

第3章においては、まず第1節で14-16世紀のルネサンスがどのようなものであるかを述べるとともに、その限界性を確認した。続いて第2節では、ルネサンスが開花するに至る歴史的背景を整理し、イタリアで生じたルネサンスが、危機の時代における帰属意識の高まりの結果もたらされたことを述べた。ここにおける帰属意識とは、当時のイタリアを古代ローマと結びつけるものであった。最後に第3節では、世界史Aを中心とする教科書記述を検討した。教科書では、なおルネサンスは近代のはじまりとして考えられていることが多く、中世との断絶性に重きがおかれていることを指摘した。

14-16世紀のルネサンスのみが、古典古代を復興させようとしたものではないし、その意味で唯一のルネサンスではなかったことは、前章を見ることによって理解されるべきである。中世におけるルネサンスと、本章で取り上げた14-16世紀のルネサンスとの間には、根本的・本質的な違いは存在しないといえるだろう。どの「ルネサンス」にも共通するのは、古典古代文化の見直しと、危機に対する内的凝集である。中世におけるルネサンスと14-16世紀のルネサンスの違いをあげるとするならば、古代が当時の人々にとって近いものであったのか、遠いものであったのかということであるだろう。もはやルネサンスは近代のはじまりではない。むしろ中世と近代の過渡期である近世との繋がりが重視されるべきなのである。

結論

以上、中世における各ルネサンスについて、3章にわたってみてきた。そこでは、「カロリング・ルネサンス」、「12世紀ルネサンス」、14-16世紀ルネサンスのそれぞれにおいて、「再生」あるいは「復興」、すなわち古典復興を目指すという動きが共通して見られたことを確認した。しかし同時に、それらは各時代の多様な文化運動の一側面であり、それぞれが持つ固有の政治・経済・社会といった諸要素を背景にして成立していたことも浮き彫りになった。つまり「ルネサンス」で表現されてきた諸文化運動は、「古典復興」に限られず、冒頭にも述べたような様々な動態的凝集運動と捉えるべきである。

また、各ルネサンス研究における進展を見たとき、かつての暗黒の「中世」というイメ

---

[50] [資料1]。

ージはもはや払拭されたと言うことができるのではないだろうか。その点で中世における各時代の文化運動に「ルネサンス」を求め、その意味を問うてきたこれまでの研究は、非常に意義のあるものであったと言うことができるだろう。

しかし、この「暗黒」の中世というイメージが払拭された今、それら各時代の動態的凝集運動を「ルネサンス」という言葉で表現してしまうと、その言葉がもつ「再生」あるいは「復興」というイメージがあまりにも強調されすぎるのではないだろうか。それぞれの文化運動のもつ多様な側面、更には背景を捨象してしまうことになるのではないだろうか。

以上のような理解に立つとき、高等学校教科書も含めて中世に幾度も生じる文化運動をどのように記述すればよいだろうか。私たちは、中世におけるこれらの文化運動を単に「ルネサンス」という言葉で安易に括り、古典復興という軸のみで語るのではなく、それぞれの文化運動が持つ多様な側面、及びそれらが生じた背景を含めて包括的に描くことが求められると考える。そして、そのように中世における各文化運動を描くとき、イタリア・ルネサンスを近代の始まりとする高等学校教科書の記述を見直すことにつながるのではないだろうか。

参考文献

総論

伊東俊太郎

2006　『十二世紀ルネサンス』、講談社学術文庫

佐藤彰一・池上俊一・高山博編

2005　『西洋中世史研究入門』、名古屋大学出版会

望田幸男ほか編

2006　『西洋近現代史入門』、名古屋大学出版会

森田鉄郎

1967　『ルネサンス期イタリア社会』、吉川弘文館

第１章

五十嵐修

2006　「カロリング帝国とローマ・カトリック世界」、服部良久・南川高志・山辺規子編『大学で学ぶ西洋史［古代・中世］』、ミネルヴァ書房

イシェ、フランソワ（蔵持不三也訳）

2003　『絵解き中世のヨーロッパ』、原書房

宇野重規

2013　『西洋政治思想史』、有斐閣アルマ

梅津淳
2012　「人文教育と教育――西ローマ帝国終焉とヨーロッパへの自由学芸継承」、『桜美林論考人文研究』3
ウルマン、ヴァルター（朝倉文市訳）
1983（初出 1965）　『中世ヨーロッパの政治思想』、御茶の水書房
大阪大学歴史教育研究会編
2015　『市民のための世界史』、大阪大学出版会
坂部恵
1997　『ヨーロッパ精神史入門 カロリング・ルネサンスの残光』、岩波書店
津田拓郎
2005　「カロリング朝教会改革のバイエルンにおける展開――ザルツブルク大司教アルノ（785[798]-821）の時代を中心に」、『西洋史研究』34
根津由規夫
2006　「西欧のビザンツ意識」、服部良久・南川高志・山辺規子編『大学で学ぶ西洋史［古代・中世］』、ミネルヴァ書房
橋本龍幸
1975　「メロヴィング＝ガリアにおける俗人の教育状況について――アンリ・ピレンヌ説の一検討」、『愛知学院大学文学部紀要』5
ブウサール、J.
1973　『シャルルマーニュの時代』、平凡社
ル＝ゴフ、ジャック（池田健二・菅沼潤訳）
2005　『中世とは何か』、藤原書店

第２章

伊東俊太郎
2006（初出 1993）　『十二世紀ルネサンス』、講談社
ヴェルジェ、ジャック（野口洋二訳）
2001　『入門　十二世紀ルネサンス』、創文社
江川溫
1991　「中世ヨーロッパ世界」、近藤和彦編『西洋世界の歴史』、山川出版社
大阪大学歴史教育研究会編
2014　『市民のための世界史』、大阪大学出版会
大嶋誠
1995　「知識と社会――大学の成立と教皇の介入を中心として」、江川溫・服部良久編『西欧中世史［中］　成長と飽和』、ミネルヴァ書房
田家康

2010　「中世温暖期の繁栄」、同『気候文明史』、日本経済新聞出版社
ハスキンズ、チャールズ・H.（別宮貞徳・朝倉又市訳）
1989　『十二世紀ルネサンス』、みすず書房
服部良久・南川高志・山辺規子編著
2006　『大学で学ぶ西洋史［古代・中世］』、ミネルヴァ書房
ベーリンガー、ヴォルフガング（松岡尚子・小関節子ほか訳）
2014　「ローマ時代の気候最良期から中世の温暖期へ」、同『気候の文明史』、丸善プラネット株式会社山本茂・藤縄謙三ほか編
1988　『西洋の歴史　〔古代・中世編〕』、ミネルヴァ書房
ラスカム、デイヴィッド（吉武憲司訳）
2000　「十二世紀ルネサンス」、同『十二世紀ルネサンス――修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成』、慶應義塾大学出版会
ル＝ゴフ、ジャック（池田健二・菅沼潤訳）
2005　『中世とは何か』、藤原書店

第３章

江川溫
2003　「西欧の民族史観とヨーロッパ・アイデンティティ」、谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』、山川出版社
江川溫
2014　『新訂　ヨーロッパの歴史』、放送大学教育振興会
近藤和彦編
2012　『西洋世界の歴史』、山川出版社
西洋中世学会編
2014　『西洋中世史研究　特集：中世とルネサンス――継続／断絶』6
バーク、ピーター（亀長洋子訳）
2005　『ヨーロッパ史入門　ルネサンス』、岩波書店
バフチーン、ミハイール（川端香男里訳）
1988　『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、せりか書房
ホイジンガ、ヨハン（堀越孝一訳）
1993　『中世の秋　上・下』、中央公論社
堀越宏一・甚野尚志編
2015　『15 のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』、ミネルヴァ書房
ミュシャンブレッド、ロベール（石井洋二郎訳）
1992　『フランス民衆社会と習俗の文明化』、筑摩書房
望田幸男ほか編
2006　『西洋近現代史入門』、名古屋大学出版会

山本茂・早川良弥ほか編
2011　『西洋の歴史　〔古代・中世編〕』、ミネルヴァ書房

執筆分担

総論：松本

第１章：明山

第２章：平田

第３章：(1) 松本、(2) ～ (5) 高垣

結論：全員

[資料1]ルネサンスの主な用語の記載状況

出版社	出版年	火砲・羅針盤・活版印刷	他国への普及
帝国書院	2005	○	×
	2012	○	×
	2014	○	×
実教出版	2002	×	○
	2005	×	×
	2012	○	○
三省堂	2002	△ 写真に印刷術の表記あり	×
	2005	○	○
一橋出版	2002	×	×
	2005	×	○
桐原書店	2002	○ 中国で発明とあり	×
	2003	○	×
東京書籍	2002	△ 活版印刷のみ	△ ネーデルラント・ドイツ
	2005	△ 活版印刷のみ	×
	2013	△ 活版印刷のみ	×
第一学習社	2002	×	○
	2002	×	○
清水書院	1997	×	○
	2012	○	○
山川出版社	2005	○	△ ネーデルラントのみ
帝国(B)	2014	○	△ ネーデルラントのみ
山川(B)	2014	○	○